卒論最終発表

2017.11.9

「今和次郎の目指した生活舞台」

－舞台活動と舞台論のコノロジー－

中谷礼仁研究室
The Believers 翻訳研究ゼミ
1x14a023-5　太田 歩

1　目次構成

【序論】
0-1　研究動機
0-2　研究目的
0-3　研究方法
0-4　既住研究

【本論】
1 章　今和次郎を取り巻く演劇の諸背景
1-1　明治から築地小劇場までの演劇・新劇史
1-2　同時代の建築家による演劇活動
1-2-1　岡田信一郎
1-2-2　須田敦夫
1-2-3　佐藤武夫
1-2-4　竹内芳太郎および建築学科生による活動
1-2-5　中村鎮
1-3　小結
2 章　舞台活動
2-1　はじめに
2-2　時代考証
2-2-1 『故郷』
2-2-2 『モンナ・ヴンナ』の経緯と評価
2-2-3　今の姿勢
2-3　教育活動
2-3-1　背景と教育の姿勢
2-3-2　出版物とイコノロジー
2-3-3　演劇分野へ与えた影響
2-4　資料提供
2-4-1　築地小劇場と今
2-4-2 『夜の宿』の歴史
2-4-3 「上間の研究図」提出の経緯と「生命」「地方色」
2-4-4 『夜の宿』と「土間の研究図」の意図
2-5　その他舞台装置について
2-6　劇場設計
2-7　小結
3 章　舞台論
3-1　はじめに
3-2　田舎の演劇と都市の演劇
3-2-1　田舎の演劇
3-2-2　都市の演劇
3-3　映画と演劇・生活舞台
3-3-1　生活舞台の前夜
3-3-2　渡欧と〈生活舞台〉のはじまり
3-3-3　発声映画のはじまり
3-4　生活舞台の幕間
3-4-1　終戦と GHQ による検閲の無効
3-4-2　二つの幕間
3-5　リアル（現実的）な各面の研究
3-5-1　テレビの時代
3-5-2　ロマンチックとリアル
3-5-3　今の教養主義への対抗
3-6　小結
4 章　考察と分析
4-1　はじめに
4-2　今の演劇活動
4-2-1　継続のきっかけ
4-2-2　演劇の〈真似〉化
4-2-3　舞台活動から舞台論への移行
4-3　遠近法とイ - コノロジー
【結論】
【謝辞】
【出典】
【参考資料】

註：
・演劇＝流れ（線）について
・舞台＝特定の上演や言説（点）について
と本論文においては使い分ける。
（言説の引用部分に関しては本来の表現を優先）
今の言動についてはそれぞれ点として取り上げているため〈舞台論〉〈舞台活動〉、それらをまとめて〈演劇活動〉と記す

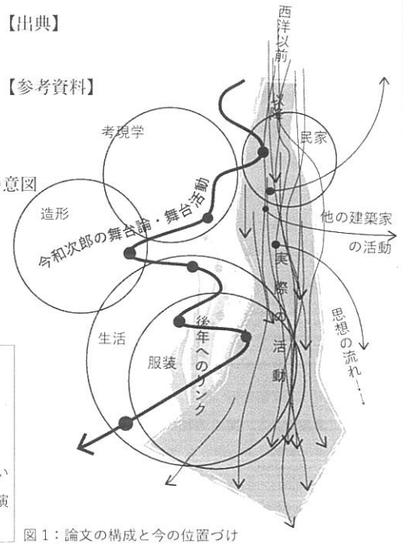

図 1：論文の構成と今の位置づけ

2　論文構成

【序論】

図 2：今和次郎

0-1: 考現学や民家研究で知られている今和次郎 (1888-1973) の文章には、しばしば舞台に関する論が登場する。それらに加えて彼は実際にいくつかの舞台の制作や教育、設計に関わっていた。（以後、これらを〈舞台論〉、〈舞台活動〉とする。）しかしそれらは今の活動を振り返ったり、彼の弟子で日本劇場史・農村舞台研究に関する著作を手がけた竹内芳太郎や音響学の佐藤武夫らへの影響という文脈でしか語られず、実際の内容は明らかにされていない。

舞台論や舞台活動を今和次郎論を述べる際の「役に立つ手段」にとどまらず、歴史も捉えながらアーカイブする方法を考えたいということが本論文の動機である。

0-2: 以下の二つを研究目的とする。
a. 今の演劇活動はどのような実態だったか / どのように評価されていたかを明らかにする
b. 様々な論のなかに書かれている今の舞台論を整理し、舞台活動とあわせて今の演劇に対する姿勢や変遷を追う

0-3: ①～③の方法により研究をすすめる。
①舞台論 / 舞台活動の抽出と整理
・舞台論は今和次郎『今和次郎集』（全九巻）(1972, ドメス出版）から抽出、整理。
現在の『考現学』『民家論』『民家採集』『住居論』『生活学』『家政論』『服装史』『服装研究』『造形論』の区分をこえて〈演劇〉〈舞台〉〈劇（場）〉〈芝居〉〈（舞台）装置〉〈（舞台）装飾〉＋具体的な公演や人物名にふれているもの等を抽出、整理する。
・舞台活動は今本人による記述、舞台に関わった劇団や人物による記述や記録、他人による記録を取り上げる。
②比較
・同時代を中心とした演劇の状況
・同時代の、後々建築分野でも活動する人物による舞台活動
を比較事項として取り上げる。
③考察と分析
①②をふまえ、今の舞台論・舞台活動それぞれへの姿勢と、それらの活動が演劇分野でどう位置づけできるかを考察・分析する。

0-4: 既住研究として、これらがあげられる。
・川添登『今和次郎　その考現学』(1987, リブロポート）
「土間の研究図」とともに今の舞台装置・教育活動と民家調査のメモが取り上げられている。今が舞台活動から学んだことは「人間の研究であり、それも普遍化され一般化された人間ではなく、それぞれ個性をもった人々の、その時々までをもとらえ、その心を読み取ること」と述べ、考現学をはじめとする今の具体的な調査を 1987 年現在とくらべ評価している。

・米山勇、川添登、中川武「日本近代建築史における早稲田建築の系譜 (1)　－演劇活動からオーディトリアムへ－」1994
佐藤功一から佐藤武夫まで、早稲田建築にまつわる人物による演劇活動を、坪内逍遙等周囲の人物との関わりあいも含めて系譜立てている。今の芸術座での活動が考現学及び佐藤武夫への影響という点から述べられている。

・米山勇、川添登、中川武「大越町娯楽場と大正後期の今和次郎の活動について　－明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・1 －」1996
今の手がけた福島県田村郡大越町にある大越町娯楽場設計の経緯と内容について述べられている。それが農村改善運動の延長線上で、農民の娯楽の在り方や竹内芳太郎らへの影響を与えたという点を指摘した。論文のなかで、農村娯楽への文脈としての〈演劇活動〉と、考現学への文脈としての〈演劇活動〉、後人への影響を与えた〈演劇活動〉との違いと研究の必要性を示唆している 。

・黒石いずみ『「建築外」の思考－今和次郎論』(2000, ドメス出版）
生活学における〈人と物の関係〉へのこだわりが〈演劇的視点〉からなされていると指摘。今がフランス人小説家のスタンダールやバルザックが示していた西洋の自然主義リアリズムを生活学や考現学における記述方法に応用していたと指摘した。

・黒石いずみ「都市の考現学、考現学の都市」2008
考現学における吉田謙吉の活躍を考えるにあたって、吉田謙吉の演劇分野での活動が取り上げられている。その活動に今が関わっていたことで、今と吉田の強い結びつきと、吉田の演劇理念や表現が考現学に影響を与えたと指摘した。

・本澤由紀「今和次郎の服装研究家としての視点 」2011
服装研究をするきっかけとして、今の手がけた舞台装置や舞台美術にまつわる授業を位置づけている。

【本論】

1 章　今和次郎の舞台活動を取り巻く演劇の諸背景

今の活動を取り巻く演劇史的背景として、明治～大正 13 年の築地小劇場までを中心に社会背景も含めた新劇史と同時代の建築家による活動をまとめた。（裏ページの表 1 参照）

1-3: 新劇完成までの歴史において、建築を通して得た西洋の知識を演劇へと応用する者が演劇・建築両方の分野で現れた。しかし新劇分野が「醜譯劇は西洋風俗を見せることを目的としてゐるのではない、地理學の標本を見せるといふのでもない」という姿勢に変わっていったことで時代考証の役割で関わっていた建築家は離れ、純粋に空間構成や役者として関わる者が現れてくる。しかし彼らもまた建築の道に専念するため演劇からは意識的に離れている。

一方、劇場史の分野では佐藤武夫や竹内芳太郎が挑むがその困難と須田敦夫という「この世の中に劇場建築史の研究のために生れて来たような」人物の存在により道を外れ、須田の研究成果は『日本劇場史の研究』として出版された。

2 章　舞台活動

今和次郎による舞台活動の実態と、それらが時代の中でどのように評価されていたかについて取り上げた 。

それらの活動は時代考証・教育活動・資料提供・舞台装置・劇場設計の五つに分類できる。

2-2：1912 年に上演され国家道徳に背馳しうるという理由で上演禁止になった文芸協会第三回公演『故郷』、1913 年に上演され「現代的な人生問題と傳來の劇的興味とを調和」をめざした芸術座第一回公演『モンナ・ヴンナ』について取り上げた。

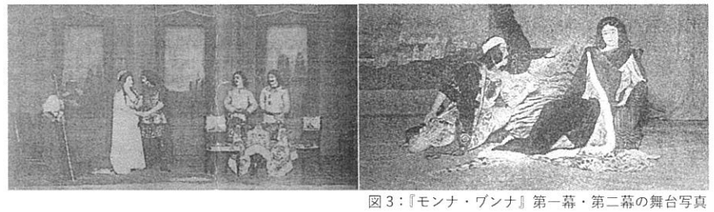

図 3：『モンナ・ヴンナ』第一幕・第二幕の舞台写真

2-3：今による西洋近代劇のための授業と出版された書籍から、今の西洋劇上演に必要な技巧を捉えそれを教育する姿勢が判明した。『実用配景図法』『装飾様式演習 I 西洋古代』の文章やその内容から分析された今の方法を、作品研究の方法論に照らし合わせて位置づけた。

図 4：『実用配景図法』(1920, 帝国工業教育会）

図 5：『装飾様式演習 I 西洋古代』(1954, 相模書房）

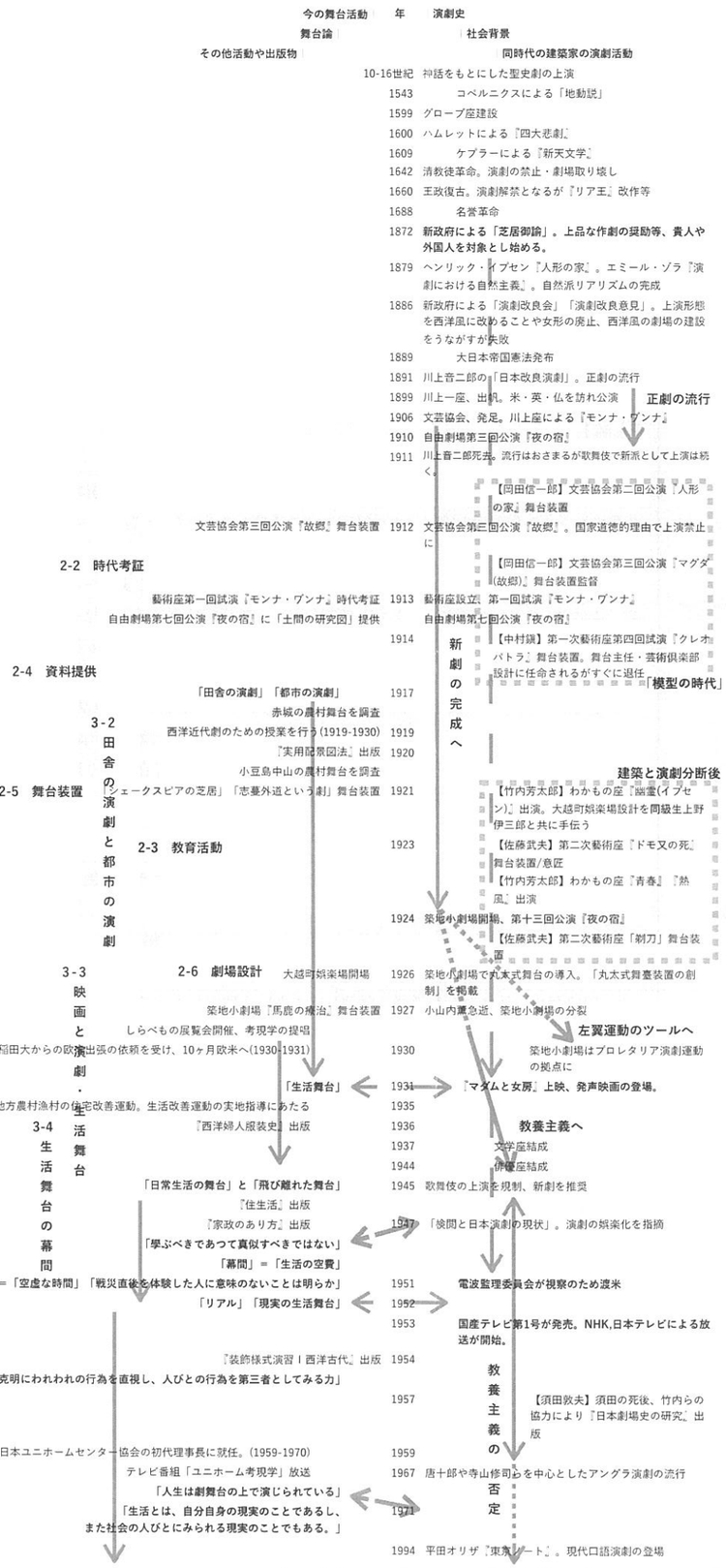

表 1：演劇史を中心とした社会の変化と同時代の建築家および今の演劇活動

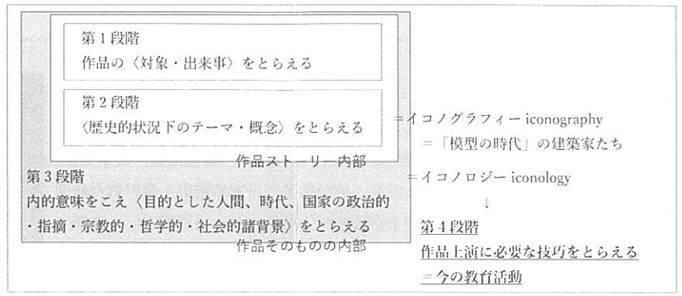

図 6：イコノロジーと照らし合わせた今と同時代の建築家の建築家達の姿勢

2-4：1913 年の自由劇場第七回公演『夜の宿』に提供された「土間の研究図」は『夜の宿』上演背景と今の文章の比較から、今の「土間の研究図」研究姿勢と日本における西洋近代劇完成の共通点が浮かび上がった。

図 7：『夜の宿』舞台写真

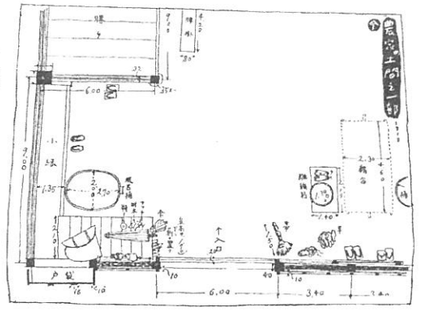

図 8：「土間の研究図」

2-5:2-4 までに取り上げた他に 1921 年頃に「シェークスピアの芝居」「志蔓外道という劇」の舞台装置を手がけているが詳細は特定できなかった。

2-6：1926 年には劇場舞台をふくむ大越町娯楽場（福島県田村郡大越町）を設計した。農村の娯楽場として開場当時は盛んに使われたものの、時代の流れとともに使用されなくなる。2007 年には「農村の生活様式を伝える建物」として文化財に登録された。

図 9：大越町娯楽場

3 章　舞台論

今の舞台論は演劇から映画、テレビと風俗を伝える娯楽媒体が拡大する時代を背景としていた。民家調査のなかで田舎の演劇と都会の演劇の違いをはやくから感じていた今は、〈生活舞台〉という言葉を用いて生活と娯楽が二分化されてしまっていること、演劇から学ぶべきリアルをみる力について主張していた。

3-1：今の文章は単語・話題に注目すると以下の 6 種類に分類でき、このなかで舞台論としては c.d.f. に注目して取り上げる。また、a.b.e. に関しては全体の傾向を分析する材料として取り上げる。

a. 偶然その単語（をふくむ言葉）として登場し、言葉・話題共に演劇とは関係がない

b. その単語（をふくむ言葉）は演劇に関係する言葉で、話題は演劇とは関係がない

c. その単語（をふくむ言葉）は演劇に関係する言葉で、かつ他の演劇に関係しない言葉と置換でき、話題は演劇とは関係がない

d. その単語（をふくむ言葉）は演劇に関係する言葉で、話題は演劇と関係する

e. 抽出対象外の言葉だが演劇に関係する言葉が登場し、話題は演劇とは関係がない

f. 抽出対象外の言葉だが演劇に関係する言葉が登場し、話題は演劇とは関係がある

3-2：農村で生活の延長の娯楽としておこなわれる田舎の演劇と、西洋の知識を舞台上だけで再現する都市の演劇を区別していた今は農村舞台の調査や農村の風景を記した「脚本のト書きのようなメモ」を残していた。また、学生達に授業と現実の生活のつながりを示す「実験」を行っていた。

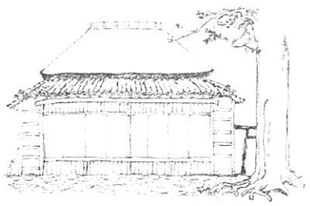

図 10：小豆島の農村舞台

3-3：具象・伝播力では演劇よりも優れた発声映画の登場を背景とし、この頃から今は〈生活舞台〉という言葉を用いるようになる。

3-4：戦後日本においては歌舞伎・新劇共に単なる娯楽となり、戦争を生き抜いた人々が生活そのものをおざなりにしてしまっている厳しい現状を〈飛び離れた舞台〉〈幕間〉によって指摘している。

3-5：テレビが登場し、ますます生活と娯楽が二分化・近接した社会に対して演劇から学ぶべき〈リアル〉をみる力をやしなうべきだと主張する。

	考現学	民家論	民家採集	住居論	生活学	家政論	服装史	服装研究	造形論
a			1		3	2		3	1
b	8	3		7	12	7	4	7	9
c	3	1		7	4	10		1	8
d	4	2		5	7	6	3	5	14
e	3			4	3			8	4
f		3	2	3	5	2			6

表 2：『今和次郎集』1~9 巻毎の a-f それぞれの含まれる個数

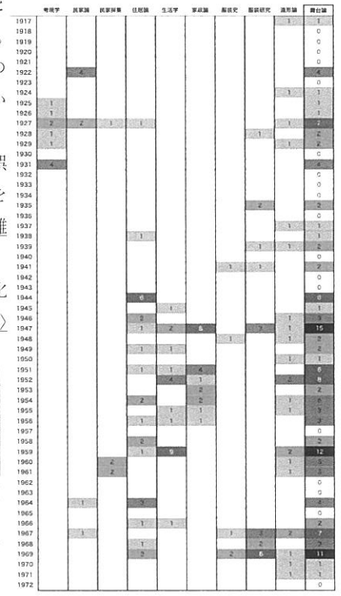

表 3：『今和次郎集』1~9 巻毎の舞台にまつわる文章およびその合計の年代分布（多い｜黒←→灰←→白｜少ない）

4 章　考察と分析

今和次郎が演劇活動に取り組み続けた理由を関わった作品や時代背景から分析した。また、今の演劇活動が〈役に立つ手段〉たりえた原因とそれを読解する読み手達との関係性について考察した。

4-2：戦後、今が主張する「今家政学」と、今が岡田の監督の下はじめて演劇と関わった『故郷』はいずれも個人の生活の在り方を主張するものであった。封建的社会において『故郷』が日本人にひろく新しい生き方を提示しえたこと、それが多くの人に受け入れられたことへの感動が今が演劇活動を継続する理由となった。

4-3：イコノロジーでは解釈の複数性が批判としてあげられているが、近代以降を生きる人々にとっては当然のこと i-conology である。そして今は自分の文章がコノロジー的解釈がされることを分かって意識的にそうしていた。

【結論】

・今和次郎による演劇活動は、昭和初期までの舞台装置や教育活動といった舞台活動に加え、文章によって晩年まで行われていたことが判明した。その背景には、演劇の娯楽化、映画やテレビといったメディアの発達により娯楽が生活と分離しながら限りなく生活に近接するようになった時代の変化があった。

・演劇活動の姿勢は、大正期に限定的に現れその後演劇の娯楽化により失われた、知識だけにとらわれない受け手それぞれの技巧―生活を意識させるものであった。この姿勢は、同時代の建築家の西洋知識の普及・完全再現といったイコノグラフィー的活動や、演劇そのものに魅せられての活動とは区別できる。

・自分の生活を直視し、社会を見当識をもって見つめるべきという主張は〈生活舞台〉という言葉を用いて繰り返し主張され、近代以降を生きる、それぞれの時代の読み手達に見当識をもった解釈―イ - コノロジー的解釈を促している。社会の変化に伴って演劇の在り方が変化していく時代を生きた今の舞台論はコノロジーである。

【出典】図 1: 筆者作成／図 2: まるごと青森 http://www.marugotoaomori.jp/ blog/2011/11/12776.html(9/23 閲覧）／図 3:『演藝畫報　第壱年第二号』(1913, 演芸画報社）／図 4: 今和次郎、大沢一郎『実用配景図法』(1920, 帝国工業教育会）／図 5: 今和次郎『装飾様式演習Ⅰ西洋古代』(1954, 相模書房）／図 6: 筆者作成／図 7: 坂本麻衣「自由劇場「夜の宿」と“模倣”論争」2003／図 8: 今和次郎『今和次郎集』9 巻 (1972, ドメス出版)p.265「土間の研究図」／図 9: 文化遺産オンライン http://bunka.nii.ac.jp/heritages/heritagebig/186193/1/2(10/31 閲覧）／図 10: 今和次郎『今和次郎集』3 巻 (1971, ドメス出版)p.372「小豆島の民家」
表 1: 筆者作成／表 2: 筆者作成／表 3: 筆者作成